

和歌山おもてなしトイレ大作戦とは？

## 心のこもったおもてなし。



熊野古道中辺路沿いの八上王子公衆トイレ（上富田町）。木材を使ったぬくもりのあるログハウス調で、美しく保たれたトイレ周辺で休憩する人も多い。この公衆トイレを支えるのは、周辺の主婦たち14人のボランティア。「きれいなトイレで気持ちがいい」「また来たいと言ってもらえるのが何よりうれしい」とメンバー。トイレの美化を通じて「地域の連帯感も強くなつた」と言う。

## 「和歌山おもてなしトイレ大作戦」概略

トイレの整備をおもてなしの原点として、県内観光関連トイレを重点整備。県有施設を全箇所整備したほか、市町村や公共交通機関、民間事業者の整備を支援。

## 《整備内容》

- 洋式トイレの導入
- 温水洗浄便座の設置
- 小便器の洗浄センサー化
- オストメイト対応設備の設置

《整備実績》 平成25～26年度 計626箇所  
(総事業費 約30億円)

世界遺産「紀伊山地の霊場と参詣道」の登録10周年、高野山開創1200年、そして今秋開催された「紀の国わかやま国体・大会」と、全国から多くの人を迎える機会が増えた和歌山。「訪れた人に、心地よく旅を楽しんでもらいたい。もう一度来たいと感じてもらいたい。そんな思いから、和歌山県では、「おもてなし運動」をスタート、中でも旅の印象を決めるトイレを「おもてなしの原点」ととらえ「和歌山おもてなしトイレ大作戦」を開始した。

事業を始めたのは2013年。まずは県が率先して県有施設を整備、次いで市町村や公共交通機関などに呼びかけ、整備を支援。総事業費30億円をかけ、官民協働のもと2年間で集中的に実施してきた。

利便性が高く、清掃も行き届き、誰もが快適に利用できるこうしたトイレは確実に増加、口コミも広がり、「きれいで気持ちいい」と多数の反響が寄せられている。

2014年に県を訪れた観光客は約3083万人。海外からの観光客も急増しており約30万人に。外国人からの評判もよく、ニーズはますます高まりそうだ。



太地町の捕鯨船前公衆トイレ。多目的トイレは最新機能が設備されている。



六文銭の飾りが勇ましい九度山町真田庵近くの町営駐車場にある公衆トイレ。

## 「おもてなしの心」、和歌山から世界へ

弊社では、これまで「暗い」、「汚い」というトイレのイメージを変えるため様々な取り組みを行ってきました。こうした中、和歌山県の「おもてなしトイレ大作戦」は画期的な取り組みで、私どもにとっても追い風となりました。この先進的な取り組みに全国の自治体も刺激を受け、交通機関や公共施設のトイレ整備が進みつつあります。美しいトイレは街の魅力を高める重要な

な要素です。利用した旅行者は「景色だけでなく、トイレもきれいだった」とSNSなどであつという間に広めってくれることでしょう。トイレでのおもてなしは、旅の“物語”的ひとつとなります。近年は外国人観光客の増加も目覚ましいですね。和歌山県のような自治体が増え、海外でも「日本はトイレがきれい」と語られるよう、ともに頑張っていきましょう。



## PROFILE

喜多村 円  
(きたむら まどか)

TOTO株式会社  
代表取締役 社長執行役員  
1957年福岡県生まれ。1981年に長崎大学経済学部卒業後、東陶機器株式会社(現TOTO株式会社)に入社。2006年に執行役員経営企画部長、2011年に取締役に就任。2014年4月から現職。2015年4月より一般社団法人日本レストルーム工業会会長を務める。